

(ルカ 16:1-13)

今日の福音のイエスさまのお話は私たちに当惑させます。イエスさまはこのようなお話をすることによって、どういうことを私たちに教えようとなさっておられるのか、聴いただけではすぐには分かりにくいからです。お話の全体もそうですが、特に、私たちをつまづかせるのは、このお話の中の管理人がしたことがどうして主人にほめられることになるのか、私たちにはなかなか納得しにくいからです。今日の福音のお話は、不正な管理人のたとえ話というふうに言われていますが、今日のお話に限らず、イエスさまが語られた、いわゆる、たとえばなしは、どれも、それを聴いただけでは、そのようなお話をすることによって、イエスさまは何を言おうとされているのか、すぐには分かりにくいという特徴を持っています。イエスさまはわざとこのような話しかたをされたと考えるべきかもしれません。聖書の中のたとえ話という言い方には、なぞなぞの「なぞ」という意味もあります。イエスさまはこのような話しかたをされることによって、子供たちがなぞなぞ遊びをするように、イエスさまがこのお話で何を言おうとしておられるのか、わたしたちに考えてみるように誘っておられるのだとも言えます。そうすることで、よりいっそう注意深くイエスさまのお話を受け止めるようにと、イエスさまはそのおことばを聴く私たちをご自分に引き付けようとなさっているのです。

なぞなぞの「なぞ」を解く鍵は、その話を何度もよく考えてみる必要がありますが、それだけではなく、その「なぞ」を出した人がどんな人で、その人は普段どんなことを考えている人なのか、どんなことに興味を持っており、どんなことを大切にしている人なのかを考えてみる必要があります。普段子供たちとあまり接したことの少ない大人たちよりも、子供たち同士のほうが、友だちが出すなぞに答えることが出来るのはそのためです。イエスさまのたとえ話のなぞを解くためにも、イエスさまとの親しみが必要になると言えるのではないかと思います。

もう一度、今日のイエスさまのお話に戻って考えてみると、私たちが一番疑問に思う点は、管理人は主人に負債のある人たちの借金を勝手に減額してやったのに、どうして、彼の主人はそのことを咎めないだけではなく、彼がしたことをほめたのかということです。あの管理人がしたことは、私たちの基準では、立派な背任行為です。彼が不正な管理人と呼ばれるのはそのためです。けれども、イ

イエスさまは、彼の主人は彼のその抜け目のないやり方を、その意図にもかかわらず、ほめているのです。なぜ、イエスさまはこのようなお話をしたのか、それを理解するためには、ルカ福音書でこのお話の直前に語られた、放蕩息子のお話を思い出してみるのがよいかもしれません。放蕩息子のお話で、私たちが一番引かかる点は、父親からせしめた遺産の全てを使い果たして戻ってきた息子を、父親があのように迎え入れたということです。あのお話で、イエスさまが語ろうとしておられるのは、私たちに対する父なる神の、私たちの責任を問おうとはなさらない、大いなる憐れみに満ちた愛です。放蕩息子に求められていることは、ただ自分が陥った悲惨な状態に気づいて、父の家に戻ることであります。同じように今日のお話でも、管理人が主人にその不正を咎められないだけでなく、むしろほめられているのは、まだ管理人としての権限があるうちに、それを賢く用いて、負債のある人たちの借金を減額してやったからです。そのことで主人が受けることになる損害は、私たちの考えを越えて、問題とはされないばかりか、むしろ、管理人がしたことは賞賛されているのです。私たちすべての者の主人である神は、私たちにもそのように振舞うことを望んでおられるのです。

イエスさまのこのようなお考えの背景には、私たちになじみ深いタレントのたとえからも解るように、私たちが持っているものの全ては、本来、主人である神様から、私たちにその管理がゆだねられたものであり、私たちに問われることは、それを如何に用いるかということだということです。そのような視点に立って、今日の福音の中で、イエスさまは私たちが生きてゆく上でなくてはならないもの、富とか財、イエスさまのお考えに従えば、わたしたちの主人である神様から私たちにその管理がゆだねられているそれら一切に対して、どのような態度を取るべきかを教えておられるのです。一言で言うなら、あなたが所有しているものは、あなたの努力の成果かもしれないが、本来、神からあなたにその管理を委ねられたものなのだから、あなたがあなたの主人である神の愛の心が分かるなら、負債のある人の負債を許してあげなさい、助けることのできる貧しい人を助けてあげなさいということです。このような具体的なことがらに対する指示は、この世の生活を生きる私たちには、具体的過ぎて、ただちに従いがたいところがあるのも事実です。けれども、イエスさまが私たちに語ってくださったことの全て、イエスさまが約束してくださることの全てを、私たちの心を慰める単なるお話、単なる頭の中の理解にとどめることなく、そこに自分の生きる道を見出し、それに従うことを、私たちの人生の中心に据えようとするなら、つまり、イエス・キリストに従う信仰者として生きようとするなら、身を切られるような思いの中で、金銭への執着心から解き放たれて、イエスさまが求められたように、側にとともに生きる貧しい人々への配慮を忘れないことが、私たちの信仰を地に足の着いたものとし、実質的に信仰を生きる道を開くことになるのです。

この世の目先の損得だけに囚われて生きてはならない。それも確かに重要だが、それに足を取られてはならない。あなたがたはそれよりも価値のある者、父なる神の愛のうちに生き、その愛のうちに最終的な永遠のいのちへと呼ばれている者たちである。今日の福音全体を通して、イエスさまが示してくださったこれら全てのことを受け入れ、それに従って生きるために、その足固めのためにも、私たちの日頃の具体的な生活目標を再検討しなければならないと思います。そのためにも、今日の福音の最後のおことば、「あなたがたは神と富とに仕えることはできない」とのきびしいおことばの前に頭をたれ、このおことばが私たちのありようを解き放つ、真の福音のおことばとなるよう、このミサで祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高